『元暁の法華経観』

―元暁注疏に於ける天台の影響の有無―

福　士　慈　稔

元暁（六一七―八六）の『法華経宗要』は、朝鮮半島に現存する最古の法華注釈書である。この『法華経宗要』を詳考すると、典処を明記していないにも関わらず、吉蔵の『法華遊意』からの引用が行われ、構成・内容にも吉蔵著述の影響が強いことが窺われる。『法華経宗要』に限っていえば『法華経宗要』に於ける元暁の法華経理解は、三論の吉蔵の立場からの理解ともいいうる。それでは、元暁は天台智顗の存在を知っていたのか、元暁著述には天台の影響が皆無であるのか、又、三論の法華経理解が彼の著述を通じて一貫して変わることがなかったか、という問題が存する。先ず、元暁が天台の存在を知っていたのかという問題に関しては、『法華経宗要』以後の著述である『涅槃宗要』の教判論で、現存の元暁の著述の中では、唯一具体的に天台の名を挙げている箇所がある。この『涅槃宗要』の段階では天台の存在を知っていた訳である。しかし、『涅槃宗要』が天台の涅槃学を継承又は若干の影響を受けているかというと決してそうではない。その名及び著述が一度も明記していないが、その終始に亘って浄影寺慧遠（五二三―九二）の『大乗義章』の影響が強く窺われる。『涅槃宗要』に於いても『法華宗要』と同様に、著述に際し影響を受けている根本的なものを明記しないという手法を使っているのである。次に、天台の影響に関しては、元暁の『大乗起信論疏』は真諦（四九九―五六九）の『大乗起信論』に関する疏であるが、ここに天台の『天台小止観』が引用されている。韓国の李永子博士によると『大乗起信論疏』の中で天台及びその著述名を明記していないと言う理由によって、内容は類似するが『天台小止観』を見ないで他人の説から借用したのではないかとされるが、『法華宗要』・『涅槃宗要』に於ける元暁の手法、及び若干順序が異なるが、持戒清浄・衣食具足・閑居静処・息諸縁処・得善知識という五縁区別とその内容から、明らかに天台の『天台小止観』を参照したことが窺われる。しかし、『大乗起信論疏』の中には法華経の引用が一度も見られず、元暁と天台と法華経の関係を見い出すことは出来ない。そのことは、『大乗起信論疏』以

後の著述である『金剛三昧経論』の中で明確となるのである。この『金剛三昧経論』は元暁の信仰告白書であり、元暁の三昧と止観の理解を深く示している著述である。この中で『金剛三昧経論』の文勢は法華経の序文と同じであり、大義も同じく「法華経の異目」であると論じ、又、『金剛三昧経論』の「入如来禅」を解釈するにあたって法華経を引用しているのである。これは明らかに天台の影響の帰結であろう。天台教学が半島に伝播された年代・元暁教学における天台の位置等についての詳細は後の機会に論述したい。

日蓮聖人の題目論

丸　茂　龍　正

日蓮聖人は、南無妙法蓮華経の題目を、一切衆生の救済の要法として、その教えの根幹とし、「唱題成仏」を説き明かされた。

日蓮聖人の説かれる唱題成仏は、多種多様な宗教的意味概念をもつが、宗教行為として所謂「口称」という行為においても着目できる。

日蓮聖人の唱題成仏思想は、日本仏教史上における「口称」という修行の系付の上に、位置づけられる場合もある。

今回の発表は、伝統的な、日本仏教における、口称修行と、日蓮聖人の唱題成仏思想の相異点を明確にするために、「日蓮聖人の唱題思想の背景」をテーマに、平安仏教における法華経修行の具体像として、法華経の題目を唱えるという行為である、唱題に着目し、日蓮聖人に先行する唱題はいかなるものであったのか、また、日蓮聖人はそれをどのように踏まえ、独自の唱題思想弘通へ踏み出していったのだろうかという事を考察した。

平安時代の唱題の事例を辿ると、九世紀末には、その例が確認できる。それら、平安時代の唱題の特徴は、㈠唱題は念仏と並用或は観音・普賢・弥勒等の信仰と一緒に行なわれていた事。㈡「南無一乗妙法蓮華経」「南無平等大会一乗妙法蓮華経」等、題目においても不揃いであった事。㈢唱題は法華経読誦・書写等に代わる、簡略化された法華経修行であった事。以上三つを挙げることができる。㈢に付け加えれば、『法華験記』にみられる「法華経の持経者」の修行は、法華経読誦と書写であっ